みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る



| メタデータ | 言語: ja<br>出版者:<br>公開日: 2013-02-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 西尾, 哲夫<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4799 |

第十三回　12月23日（木）放送／12月24日（金）再放送

# 中東への窓　新世紀のアラビアンナイト

## 「砂漠の黒薔薇」――宝塚レビュー

二〇〇〇年一月、宝塚歌劇で『レビュー・アラビアンナイト　砂漠の黒薔薇』と題する作品が上演されました。バルク王国のアリシャール王子、実は砂漠の黒薔薇を名のる義賊と隣国の姫とのロマンスを主軸とし、世継ぎ争いをめぐる宮廷の陰謀を背景に数組の男女の恋模様を織りまぜた脚本になっています。

題名にひかれてチケットを手に入れようとしたのですが、どこを探しても早々に売り切れなのです。こうなるとどうしても見たくなるのが人情ですから、家族に熱心な宝塚ファンがいるという同僚にもあたってみたのですが、「今回ばかりはどうしても無理です」という返事でした。それもそのはず、この公演は宙組（そら）トップスター姿月（しづき）あさとの退団公演だったのです。後で知ったのですが、本作品のチケット競争率は当時の史上最高だったそうです。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

宝塚歌劇グランドレビュー「アラビアン・ナイト」(1950) より　© 宝塚歌劇団

さて、『砂漠の黒薔薇』の内容を少し確認してみましょう。シャゼナン国だとかハルン王子のように、アラビアンナイトに親しんできた読者には親しい名前が次々と出てくるのですが、アラビアンナイトの物語を土台にしているわけではありません。レビューアラビアンナイトという題名は、三日月に照らされた砂漠、豪華な王宮やハーレム、異国情緒たっぷりのにぎやかなバザールなど、アラビアンナイトという言葉から連想されるイメージにもとづくものだと言えるでしょう。

宝塚歌劇では、かなり古い時代からアラビアンナイトに題材を求めたレビューを上演してきました。歌劇団の創設は一九一三年。これはガラン版をもとにした児童文学としてのアラビアンナイトが定着していく時期と重なっており、一九二一年には『アラビアンナイ

ト』、一九二三年には『ドーバンの首』が上演されています。二つ目の『ドーバンの首』は、第十一回で紹介した「ギリシアの王とドゥバーン賢者の話」と同じ物語です。

歌劇団の創設者小林一三は小説家をこころざしたというだけあって筆がたち、『ダマスクスの三人娘』（一九一六）などの作品をみずから手がけました。『ダマスクスの三人娘』という題名からは、荷担ぎ男や遊行僧らが登場する傑作ファンタジー「バグダードの荷担ぎ男と三人の娘たち」を連想するのですが、小林作品はアラビアンナイトの物語を下敷きにしているわけではなく、アラビア風の名をした人物が登場しているにすぎません。

戦後になると、アラビアンナイトをテーマとする欧米のバレエやミュージカルに拠った作品も演じられるようになり、バレエ作品『シェヘラザード』（一九五一）や、ミュージカルを下敷きにした『キスメット』（一九五五）なども演じられています。関東大震災（一九二三）の直後には、子ども向けの雑誌がアラビアンナイト特集を組んでいますが、これと同じように終戦後の一九五〇年代にはアラビアンナイトやアラビアンナイト風の作品が次々と舞台にのぼりました。とりわけ一九五〇年の『アラビアン・ナイト』は人気を博し、小林一三の日記にも、（アラビアンナイトが好評であることは）低迷している景気を刺激するので嬉しいという意味の一節が記されています。

この作品ではアラビアンナイトに入っている「靴屋マアルーフの物語」が劇中劇として採用されており、アラビアとはわけのわからない話が展開する夢の中の異郷であるという設定

になっていました。また、空飛ぶじゅうたんをはじめとする大掛かりな舞台装置で話題になった『翔んでアラビアンナイト』（一九八三）のような作品もあります。

このように宝塚歌劇の舞台にとり入れられたアラビアンナイトは、ファンタジーの舞台としての中東イメージを忠実に再現するものだったと言えるでしょう。言葉をかえると、宝塚ではアラビアンナイトを生み出した中東の文化に対する言及を意図的に避けることにより、娯楽性を高めてきたのです。

## さまざまなエンターテインメント――アニメ、マンガ、ゲーム

このようなアラビアンナイト調理法は、宝塚の舞台に限ったことではありません。アラビアンナイトは、文学、演劇、映画、音楽、絵画などのありとあらゆる創作活動にインスピレーションを与えてきました。現代のエンターテインメントを代表するアニメ、マンガ、電子ゲームなどの分野でもアラビアンナイトは際限なく登場しています。

アラビアンナイトをテーマにしたアニメ映画としては、何といってもディズニーのアラジンが有名ですが、日本でも手塚治虫（一九二八～八九）の大作アニメーション『千夜一夜物語』（一九六九）をはじめとしてアラビアンナイトをあつかった作品は数多く作られてきました。児童文学としてのアラビアンナイトが定着した結果、アラジン、アリババ、シンドバッドなどの主要キャラクター、空飛ぶじゅうたんや魔法のランプなどの小道具を説明抜きで

使用できるようになりましたから、大衆文化の伸張とともにこれらのパーツを自由に組み合わせて新しい物語を作ることが容易になったのです。

たとえば東映動画『アラビアンナイト・シンドバッドの冒険』（一九六二）や、『アリババと40匹の盗賊』（一九七一）などでも、原作を離れた自由な脚色がおこなわれています。『アリババと40匹の盗賊』ではアリババに殺された盗賊の子孫ハック少年が、ネズミや猫の加勢を得て史上最低最悪の王様、アリババ三十三世をやっつけます。アリババのオリジナルストーリーは、盗賊との騙しあいという日本ではあまりなじみのない文学ジャンルに属しているのですが、このような形になることによって、素直に主人公を応援できるような展開に生まれ変わったと言えるでしょう。

パーツが自由に組み合わされるようになると、それまでにはなかった新しいパーツや組み合わせも生まれてきます。たとえばディズニーのアラジンに登場した悪宰相ジャファーは、名作映画『バグダッドの盗賊（リメイク版）』（一九四〇）に登場したキャラクターを借用していますが、アラジンの原作にはこのような悪宰相は登場しません。また、現在ではほとんどのアラビアンナイト映画に当然のように登場する空とぶじゅうたんは、『死滅の谷』（一九二一）というサイレント映画に使われたのが最初だったようです。『死滅の谷』は死神と乙女をめぐる象徴主義的な展開となっており、最近になって日本でもＤＶＤ（『死神の谷』）が発売されました。

一方、マンガの世界でもアラビアンナイトは何度もとりあげられてきました。日本における初期の作品としては、清水崑の『長編漫画　アラビアンナイトのらくろアブー』（一九四八）などがあります。手塚治虫『珍アラビアンナイト』（一九五一）、碧ゆかこ『はるか遠き国の物語』（一九八七）、山本貴嗣『シンバッド』（一九九一）、長谷川哲也『アラビアンナイト』（二〇〇〇）、モンキー・パンチ『千夜一夜物語』（二〇〇四）、大高忍『マギ』（二〇一〇、連載中）などのように、アラビアンナイトやアラビア風のテーマに題材を求めながら自由な発想で描かれた作品が次々と発表されています。

さらにゲームに目を転じれば、アメリカのカードゲームで日本でも熱心なファンがいる「マジック・ザ・ギャザリング」にもアラビアンナイトのシリーズがありますし、国民的な人気をほこるロールプレイングゲーム「ドラゴンクエスト」のシリーズにも、アラビアンナイトから採ったモチーフが頻出し、空とぶじゅうたんやランプの魔王などのキャラクターが登場するだけでなく、アラビア風の町ではベリーダンスのショーが開かれているという設定になっています。

## ベリーダンスの流行——中東文化への関心

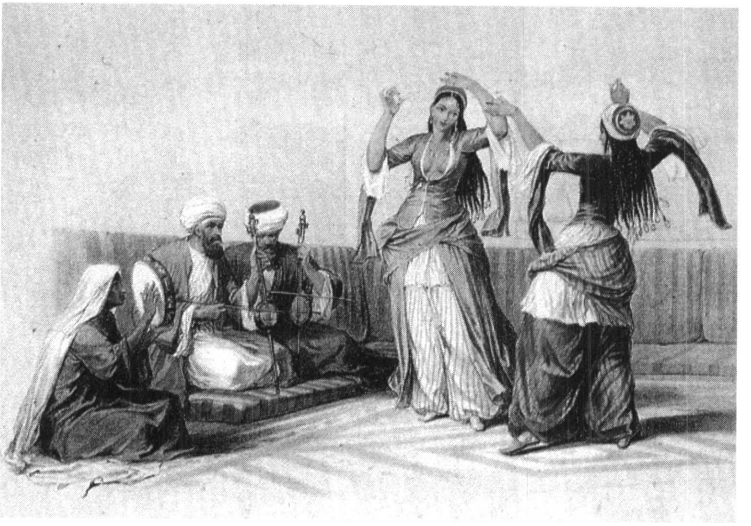
このところ世界的な広がりを見せているベリーダンスは、もとは中東地方の踊りでした。十九世紀になってヨーロッパ列強による中東の植民地化が進むと、西洋人が求めるオリエン

タルイメージにそったダンスへと変わっていき、現在のようなスタイルになったとされています。

ベリーダンスの歴史についてはよくわかっていないのですが、アラビア語ではラクス・シャルキー、つまり東方の踊りと呼ばれており、ガワージー（現在はロマと総称されるいわゆるジプシー）の踊りと関係が深いのではないかとされています。近代以前の都市部ではアーリマ（アルマ）と呼ばれる人々が、専属の楽団とともに結婚式などに呼ばれて踊りを披露していました。現代のカイロなどでも祝い事に際してはダンサーを呼び、一同でダンスに興じている光景がよく見られます。ただし、ベリーダンスの衣装が現在のようなビキニスタイルになったのは、このダンスがハリウッド映画に登場するようになってからのことです。

最近は日本でもベリーダンスの教室が増え、中東料理を出すエスニックレストランなどでは定期的にベリーダンスのショーを開く店が多いようです。実際のベリーダンスショーをご覧になった方は、女性の魅力を凝縮したような特徴的な動きのダンスに目を奪われたのではないでしょうか。

ベリーダンスは、欧米諸国だけでなく、日本、韓国、中国（台湾を含む）、シンガポールなどのアジア諸国でも人気となっています。各国のベリーダンス教室や、カイロで開かれる国際ベリーダンスフェスティバルの会場で、このダンスの魅力について女性たちにインタビューしたところ、さまざまな意見を聞くことができました。



19世紀初頭、カイロのガワージー（デイビッド・ロバート画、ロンドン）

ダイエットのため、ストレス発散のため、女どうしのコミュニケーションを楽しむためという理由もよく耳にしたのですが、もっとも多かった意見は「男性の視線を意識せずに女性としての自分の身体を再確認できる」というものでした。ジェンダーの違いが社会制度化していくにつれて、女性の身体性が現実から乖離（かいり）していく傾向が強まってくると、女性本来の体の動きを自由に表現できるものとしてのベリーダンスに惹かれる人が増えているのかもしれません。

さらにもう一つ、アラビアンナイトの世界にあこがれてベリーダンスを始めたという人も少なくありませんでした。日本でベリーダンスを教えている先生によると、「（アラビアンナイトのような）衣装を着たくてベリーダンスを始めた人も多い」そうです。また、ベ

リーダンスを習うようになって、アラビアンナイトや中東の文化に興味を持つようになったという人も同じくらいいました。

中東との直接的なかかわりを持たなかった日本では、アラビアンナイトがファンタジーとしての中東世界を規定してきましたが、さまざまな異文化体験の場が広がってくるにつれて中東文化への窓口としての機能を発揮しつつあると言えるでしょう。

## 中東への窓——社会資料としてのアラビアンナイト

ヨーロッパでは古くから中東研究がさかんでしたが、民衆の生活をとりあつかう社会史が研究対象となったのはごく最近のことです。千年をかけて今のような形に整えられてきたアラビアンナイトは、庶民の暮らしをめぐる情報を豊富に伝えていますから、たとえばレインなどはこの点に注目して学術的な注を入れた翻訳版を世に出したわけです。

中世の暮らしを活写している箇所としてよく引用されるくだりとしては、「バグダードの荷担ぎ男と三人の娘たち」冒頭部の買い物シーンがあります。ここでは三姉妹の一人がクリスチャンの男からオリーヴ色の瓶を受けとっています。東洋文庫版にはオリーヴ色の瓶としか書いてありませんが、これはワインの瓶を意味しています。アッバース朝時代のバグダードでワイン商になれるのは、クリスチャンかユダヤ教徒に限られていました。これは同時代の記録からも確認できます。

ワインを買った娘はさらに「シリア産の林檎、オスマーンのまるめろの実、オマーン産の桃、アレッポのジャスミン、ダマスクスの睡蓮、やわらかな胡瓜、エジプト産のレモン」などを次々と買い求めます。何気なく読むと「交易の中心地バグダードには世界中の物産が集まっていたのだな」と思ってしまうのですが、中世イスラーム史の専門家ロバート・アーウィンは『必携アラビアン・ナイト』の中で、「シリアの産物がどっさり入っているのは解せないしイラクもしくはもっと東の地方から入って来たような食料品が、ほとんど一つもなさそうなのもおかしい」と述べています。つまりこの買い物シーンには、後世の筆が加わっていた可能性があるのです。

またユダヤ人をめぐる表現にしても、初期の成立と思われる「せむしの話」には、ユダヤ教徒の医者が登場し、ムスリムのお台所監督やクリスチャンの仲買人ともども、「被害者を殺してしまったのは自分です」と正直に名乗り出ています。アッバース朝時代、医者の多くはユダヤ教徒やネストリウス派のクリスチャンでした。ところが近世以後に成立したと思われる作品には「サタンよりも堕落したユダヤ人」（「アラジン」）という表現が出てきたり、これといった落ち度もないユダヤ人が惨殺されたり（「商人マスルールと彼が見た夢の話」）しています。つまり、物語の成立時期によってユダヤ人の描き方も変わっているのです。

すでにお話ししてきたように、アラビアンナイトの原型とされるいくつかの物語は、アッバース朝の時代に作られたのではないかとされていますが、現在のような形（たとえばカル

カッタ第二版）になったのは近代になってからですから、最古層の物語と近代以降に採録されたものとでは、千年ほどの開きがあることになってしまいます。

このような理由からアラビアンナイトを社会史の資料として読むには注意が必要になってきますし、バートン版やマルドリュス版などでは西欧の脳内妄想が満開となっている部分もあるのですが、全体として見ればこの物語集が、中世から近世にかけての中東の人々の考え方や日々の暮らしをあざやかに描き出していることはまちがいないでしょう。

## 新世紀のアラビアンナイト——千一夜は永遠に紡がれる

アラビアンナイトとは、アルフ・ライラ・ワ・ライラすなわち千一夜という原題のとおり、シャフリヤール王をめぐる枠物語にそいながら果てしなく語り続けられる物語の集合体だと言えます。これまでにもアラビアンナイトを土台として、自由な発想による物語が次々と紡がれてきましたし、これからも新しい物語が無数に生み出されていくことでしょう。

ガランによるアラビアンナイト翻訳三百年を記念して開催された国立民族学博物館特別展「アラビアンナイト大博覧会」では、新世紀のアラビアンナイトを探る試みとして、アラビアンナイトにもとづく講談「アリババと四十人の盗賊」（旭堂南海）、落語「男と仕立屋、ユダヤ人の医者、御用係、キリスト教徒の仲買人の物語」（桂九雀）、３Ｄコンピュータグラフィックスによるアニメーション「ヤング・シェヘラザード」（製作・国立民族学博物館、制作

監修・西尾哲夫、原作・モンキー・パンチ［未発表作品］、構成・脚本・監督・おおすみ正秋、アニメーション制作・PRO、制作協力・NHKエンタープライズ21）を上演して好評を博しました。このうち、落語は『太兵衛餅』という題名で九雀師匠の持ちネタになっています。

ところで二〇〇一年九月十一日の世界同時多発テロ事件は、日本人の中東イメージにはかりしれない衝撃を与えました。これ以前から、パレスチナ問題をはじめとする深刻な諸問題をかかえる中東世界には危険地帯としてのイメージがありましたが、九月十一日のできごとは中東世界に対する視点を決定的に変化させたのです。

二〇〇八年の宝塚では、中東を舞台とするレビューとしては『砂漠の黒薔薇』以後初めての作品となる『愛と死のアラビア』が上演されました。『愛と死のアラビア』は、捕虜となってエジプトにとどまった実在のイギリス軍兵士を主人公とする史劇であり、アラビアンナイトを題材にしているわけではありませんが、上演に先立って脚本をチェックして欲しいという依頼を受けました。中東の文化や社会事情が正しく描かれているかどうかを確認するためです。私が指摘したのは全体から見れば些細な点でしたが、後日、公演を鑑賞したところ、ベドウィン（アラブ遊牧民）の衣装は実物に近いものでしたし、女性は身内の男性以外には肌を触らせないというイスラームのしきたりもきちんと描かれていました。ファンタジーの舞台としてではなく、現実の世界としてのアラブの文化と独自性を描いた宝塚作品は、これが初めてだったのではないでしょうか。

このような変化の原因を短絡的に断定することはできませんが、アラビアンナイトという窓を通して広く受け入れられてきた中東イメージが、九・一一のインパクトによって現実的なものへと収斂（しゅうれん）していくプロセスとも考えられます。

千年をかけて変身をくりかえし膨張の一途をたどってきたアラビアンナイトは、ある時には中東への夢と憧れをかきたて、ある時には一方的な妄想の対象ともなってきましたが、日本に紹介されてからは数少ない中東への窓としての機能を果たしてきました。ベリーダンスなどの異文化体験の機会が増加するにつれ、アラビアンナイトという窓から見えてくる中東世界の文化をとおして新しい視点に気づく人たちも増えています。

アラビアンナイトはこれからも新しい物語を紡ぎだし、中東への窓をさらに広げていくでしょう。そして何と言ってもアラビアンナイトの魅力は、自意識という名の迷路にとらわれることなく、合理精神という名の鎖につながれることなく、さかしらな人智を超えた不思議が横溢（おういつ）する物語の世界にあるのだと思います。

---

本書には、現在の人権意識では不適切と思われる表現がみられますが、物語がつくられ、またヨーロッパ等に紹介された状況等を解説することを目的としているため、物語名等を原文のまま掲載しました。御理解賜りますよう御願い申し上げます。

（編集部）